
シボレテ

ジャンガリアンハムスターは世界最強種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シボレテ

【Zコード】

Z0768V

【作者名】

ジャンガリアンハムスターは世界最強種

【あらすじ】

お母さんが言いました「真剣に交際している人がいる」と。相手は44歳の美中年でした。14歳の息子さんに「雪ちゃん、一目惚れですッ。結婚しましょう」とプロポーズされました。美中年は「HAHAHA」とか笑っているし、お母さんは「うふふ」と微笑着んでいるし。そうですが、私一人がツツコミですか。他3人全員ボケつてバランス悪くない？＊＊＊＊＊シボレテは聖書に出てくる文言ですが、そういう色合には全くありません。

美中年と美少年

「H A H A H A 君が雪乃ちゃんだねッ
ボクが新しい P A P A だよツツー！」

綺麗な歯並びを遺憾なく見せつけ、キラーンと効果音。
涼しげな田元をした、なかなかの美中年ではないか。
この美中年は永井聰（44歳）さん。母の交際相手の方だ。
お母さんやツるうう

息子さんの方に田元を向けても、やはり相当の美人さんだ。
親子そろって眼福。眼福。

でもなあ。

美中年さん。それは違う。

私の母と、貴方が籍をいれても、当然に父とはならない。

社会一般常識的にはそうかもしぬないが、法律的には貴方は私の姻族。

自己の血族（＝お母さん）の配偶者に過ぎない。

親子関係は発生していないのだ。

「志保さんにOK貰つて養子の手続きもするからねッ！」

勿論シンちゃん あ、息子の事ね も大歓迎しているから、骨肉の争いの心配は無いよ。

ボクの事は、おとうちゃん・とー様・パパ上 etc .
なんてよんでも構わないよツー！」

なん・・・・だと！？

この美中年大丈夫？頭のネジどつか緩んでるんじゃあ？と最初はそ

のネタとしか思えないボケっぷりにドン引きだつたのだが。
にしても随分ぬかりの無い方だな。

「これで、相続はばっちりだから!」とか「贈与税なんてバカ高い
からな。ケツ」とか穏やかではなこと言つていてる。

息子さんも歓迎してくれているのかあ。
でも、弟よ。いいのかな?あなたの相続分減つちやうんだよ?とい、
チラリと弟を見てみた。

弟と曰があう。

とろける様な笑顔で美しく微笑んでいる。
ちょ、おま、すつこいなあ。何その笑顔。
おねえちゃん心配だよ?

息子さん曰く、「同法の場で働いている人だから任せたければ大丈
夫」とのこと。

えつ?永井さんは法律の専門家なの?

それなら、間違いはないだろつ。

それよりも日本の法曹界の心配しきやつよ、おねえちゃんは。

キラキラしい弟は、

「こんな可愛い人がおねえちゃんなんて。俺はまだ14だから後4
年待つててね」

とか怪しい発言してくる。弟も・・・ボケなの?っていうかボケな
の?

「シンちゃん。男の子は18歳になれば婚姻できるが、その場合だ
つて親の承諾が必要なんだぞ。未成年だから。」
「ハツ!...う~ん。父さん母さん承諾してくれる?」
「どうしょおつかな しょおつかな やめよおつかな」
「あ~。でも聰さん。父母の同意を欠いた時は取消原因にはならな

いんじやなかつたかしら

「え？ 母さんどういう意味ッ？」

「志保さん! 駄目じゃないか、こおいつう(コシン)」

「うふふ。」みんなさい。

「いいんだよハーツ（CHU）

卷之三

つまりな、シンちゃん。女16・男18歳に達していれば、親の同意が無くとも役所で通つちゃえはいけないものなの。もひ取消なんて出来ないんだよ。

二
「

「えっ？ 父さん、本当？」

ג'ט

「だつて。雪ちゃん！」

卷之三

美中年さん。いらん知識を与えないで頂きたい。

ボーナスで天竺葵のソシヨミズム、ヨーロピ

「…三が和一人だとハシソンア悪いし
非常

卷之三

「ええええええええええええええ？何でツ？」

卷之三

「ハハハハ！ シンタロー、雪ちゃんに一本取られたなッ！」

残念な美形

母・齊藤志保は、私・齊藤雪乃が12歳の時から女手一つで私を育ててくれている。

私は、公立高校に通う3年生。本当は中学卒業後、働きに出ようとを考えていたが、母に反対され高校に進学した。

勿論お金がないからである。

母は頑として聞き入れず、結局私が折れた。

今は、高校生活をエンジョイしている。

そんな3年生のある春のつららかな日、母が私に話があるの。と来たもんだ。

実は、最近怪しいなと思っていた所である。

仕事の帰りが遅いな。とか、あれ？香水なんてつけているの。とかね。

良かつた良かつた！！

母は、娘の私から見ても中々の美人さんだし。
歳だつてまだ、39歳のはず。

今まで、散々苦労していたし、初婚は悲劇だったし、貧乏なせいで働き詰めだし。

良い人がいたら私に構わず一緒になるんだよ、と毎日口説いた甲斐があつたッ！

「話つてなあに？」

まあ、多少白々しいかもしれないけれど、その辺は、ティーンエイジャーの私の心中（何となくお年頃の私としても母の恋話聞くのは氣恥ずかしい）察して下さー。

すると、母は頬を染めて、

「実は、真剣にお付き合いしている人がいるの」

「こううじゅあ、ありますか。」

内心、キタ ツーピデッド・ドット興奮するが、表

面上は落ち着いて尋ねてみる。

「うわあ。どんな人？」

「うん。その人も、お子さんがいらっしゃって。年齢は44歳なの。奥様とは、8年前に離婚されているんですって」

「お子さん? 歳は同じくらい?」

「そう。中学3年生らしいわよ。」

「へえ~」

私は一人っ子だし、親戚も縁が無いので年の近い親戚が出来ることは、とても嬉しい事だった。

「ねえ。向こうは私の事、知っているの?」

「良く知っているわよ。お母さん全部話したもの。」

「で、真剣な交際をしているの?」

「実は、昨日プロポーズされたの」

・・・・・・

フリーズ状態。

え?

プロポーズ?

いきなり?

「それで、娘と話しあつて決めますつてお母さん言つちゃつてね。」「うへへへん。事情知った上で、プロポーズとは、中々やりますな

あ。

「そうなの。うふふ」

母が、頬を染めて可憐に微笑んでいる。
こんな笑顔見た事あつたっけ？私の父は、所謂 暴力男で、私も母
もしそつちゅう被害にあつていた。
あんなに苦労した母だ。

母が幸せになるのなら、私は何でもする。

「その人は、その、優しくて良い人、なんだよね？」

「うん。先日、息子さんに会つた時に聞いてみたの。

あ、息子さんはその時初めて会つて「コーヒーを飲んだんだけれ
ど。

『お父様はどんなパパなの？』 つて尋ねたら、

『俺に甘い所がありますけど、普通の親馬鹿な父親です』 つて言
うのよ

「え？ 親馬鹿つて普通なの？」

「私も、雪乃には親馬鹿じやない？」

嗚呼、成程。確かに、お母さんは私に甘いな。

それでねと母が言うには、今度の土曜日に4人で食事に行こうとの
こと。

私は、勿論同意した。

何より私にとつては、お母さんの幸せが第一だ。再婚相手が、素敵
な人なら言う事なしだ。

そして、当日。

ダークグレイのスーツを隙なく着こなした永井聰（44）さんと息
子さんの永井晋太郎（14）君と初顔合わせした。

ちょっと、残念な所もあるけれど、話してみて中々良い人じゃないか！！

何と言つても、息子の愛で溢れている。

溢れすぎている。

ちょっと、私、溺死しそうなくらいに溢れている。

食事はホテルの中華料理屋さんである。

昼食後、私の提案で将来の父・私組と母・将来の弟組に分かれて少し散歩することになった。

本音を言おう。

私は、この間にこの美中年の真意を聞いたかったのである。
街内からは結構離れているので、広大な庭は美しく、季節の花が色々
とつぱり咲いている。

「そういえば、仕事なにしてるんですか？」

確か、法律家とか弟が言つていたなあ。

「僕はね、裁判所で働いてるよッ！」
「へえ。裁判所・・・」

意識して声を地を這うように低く、含みのある口調にする。
顔を、永井さんに挑むように真っ直ぐ向けた。
暫らくお互に無言だつた。

先に動いたのは、永井さんの方。真剣な表情で私と向かい合つ。

「僕は、札幌地裁で裁判官として働いてる。

札幌に赴任したのは一昨年の10月で、その前は前橋、その前は

福岡、滋賀と転々としている。

裁判官はね、転勤が多いんだよ。大体3年ごとに移動がある。

官舎に住んでるので住む場所の心配は無いけれど、正直根無し草のような所はある。実際、シンタローには迷惑ばかりかけている。僕の元妻はね。シンタローが6歳の時出て行つたんだ。6歳のシンタローを一人残してね。

確かに、仕事に忙殺されていた。それを言い訳にするつもりは無いけれど、離婚届だけを置いて、預金を全部引き下ろして、シンタローを幼稚園に預けたまま、何も言わず出て行つたんだよ

怒りは感じるが、静かな、落ち着いた声だった。

はじめ、私はそれが目の前にいるこの人の声だとは思わなかった。

「お父さん」

「！」

はつはいつ

「凄い。良い声。」

「・・・え？」

「突然ごめんなさい。

でも、良い声。落ち着いて、深みがあつて

「・・・はあ。ありがとう」

この人の怒りは、静かな怒りだ。

話しあつて、解決しようとする人だ。暴力性は無い。

「うちのことは、母が話したと聞きました。」

「全部ね。こんなこと言つちゃなんだけれど、僕は裁判官だ。雪乃ちゃんの盾にも槍にもなれる」

「・・・」

「それに、志保さんから聞いたんだけれど、大学進学を諦めている

「うだね

この人は。

「今は、高校3年の6月。センター試験まであと8か月あるね」

「ゴクリ、と思わず生睡を飲んでしまった。

「お父さんは、いつもみて結構稼いでますよ」

パチン とウイニングされる。（どうやつたら、片手だけを喰れるんだろう）
やられた。
この人は。

今からでも間に合つかー？

進学、したい。私は教師になるのが夢だった。小学校の時も、中学校の時も、私は素晴らしい先生に助けられていたから。

お金が無くて、断念していた。

母は、昼間は定食屋、夜はスーパーのレジと頑張って働いている。しかしそれでも稼ぐ金は、やれ家賃だ光熱費だ食費だ消耗品だと消費してしまい無くなつていく。

「進学、したいです」

足や手が震えるが、これは武者震いだ。

良く出来ました、といつのように永井さんが私の頭を撫でてくれる。

「うん。大丈夫だよ」

大丈夫よ

賽は投げられた。

パンドラの箱

しかし、人生は甘くなかつた。

私はセンター試験でボコボコにされた。

滑り止めの私立（東京）に受かっていたが、結局、私は父に頭を下げ、1年だけ浪人させてもらうことになつた。

次、駄目なら諦めよう。

私の母と永井さんは再婚した。

あの初対面の日からわずか2週間後のことだった。式は挙げずに、記念にスタジオで写真を撮つた。

私は、永井聰さんと正式に養子縁組をして、親子となつた。

一人で、永井さんの官舎に引っ越し、4人での生活が始まった。

前述したとおり、志望大学には落ちてしまい私は現在浪人生である。

しかし、桜散る私は打つて變つて、弟のシンタローはチート様でした。

某進学校に合格。

入学式では総代をつとめたらしい。（つて事は、主席合格かよ）

高校では、アイスホッケー 倶楽部に所属し、活躍中。

成績も馬鹿みたいに良いし。

何でも、数学は得意で先生から「永井君は出なくて良いよ」と今まで言われたと母から聞いた。

そして初めて会つた時は私と同じ位の身長がドンドン伸びて、今や私は見上げなければならぬ程だつた。

14歳の時はまだまだ、少年っぽさが残つていたが、最近は青年へと羽化していく様な所があつた。

当然、女の子からはとてもモテるらしく、2月のバレンタインや誕生日にはお菓子を山ほど持ち帰つて来てくれた。

そんなシンタローは、若干シスコン気味のところがあった。

「雪ちゃん。雪ちゃん。」と懷いてくれる。

スーパーへの買い物には、「デートだ。デート」といつて荷物持ちまでしてくれるし。

何といつても、頭が良いので私の家庭教師になつてくれて、勉強を教えてくれる。

とても可愛い私の弟である。

そんなある日。シンタローが練習中に怪我をして2日入院となつた。私もお見舞いに行きたかったが、大したことは無いから大丈夫と言われ、結局は行かなかつた。

シンタローの退院の日、母が車でむかえに行き、私はシンタローの大好きな唐揚げを作つていた。
ガチャ、と音がする。

玄関に行くと、久しぶりのシンタローの姿。

「おかえりなさい
「ただいま」

後ろから、お母さんが家に上がる。お父さんも一緒にいたみたいで、家族全員が久しぶりに顔を揃えた。

お父さんがシンタローをいじりはじめた。

「シンちゃん。怪我なんてカツコワル〜イ ここがあー！」
「うわあーやめろよー！」
「ここがあーー！」

といつてシンタローのギブスを引っ張つたり、グリグリしたりする。最初は呆れていたシンタローも、ニヤリと笑う。

「いの野郎。よくもやつてくれたな」

その時、

私は何が起きたのか

自分でもよく分からぬ

絶叫する。

怖い！

**痛
い
！**

お父さんや止めてえええ！

パンダの箱（後書き）

シンタローの数学のエピソードは下記からパクリました。

高橋洋一『さらいば財務省 官僚すべてを敵にした男の告白』 講談社・2008

無限ループ（前書き）

残酷な表現あり。
暴力描写あり。

無限ループ

私の記憶では（定かではないが）小学生高学年あたりから、父から暴行を受けていた。

最初は、泣いて見ているだけだった私が、男に喰つてかかった事が原因らしい。

男が暴れる。

母と私が逃げる。

再び、男が暴れる。

母と私が逃げる。

この繰り返しだった。

ある日、男が暴れて母と私は民間シェルターに逃げ込んだ。

暴行のあとをみて事態の深刻さを理解した警察がやっと動き出し、父を数日間拘置所に入れてくれた。

しかし。

本当の地獄はここから始まつたのである。

それから数日後。

その日は父が拘置所から家に帰つてくる日だった。
私が学校から帰つてきて、夕飯の支度をしていた。
母が、父を連れて帰つて來た。

後から聞いた話では父は警察での態度は良く、家に到着するその時まで驚くほど優しかつたという。
ガチャリ。

「ただいま」

「・・・おかえりなさい」

男と久しぶりに顔を合わせた。

二
九

と、その男は笑つて言つた。

「よくもやつてくれたな」

その瞬間、隣にいた母の左目あたりを殴る。

母の身体が真横に吹っ飛び、壁に頭からぶつかる。

猛然と男が私の襟

猛烈と男が和の襟首を握り、掛け飛はした
背中から思いつゝきり地面に打ちつけられ、高

バシッといふ音が體にえた

そして今度は、私の右頬が殴られる。

バシツ！バシツ！バシツ！

母が、私を守りうと男の背中に飛びかかる。
男の注意が母に向う。

八
キ
イ
!

と音がして、母が後ろに倒せれる。
バシッバシッ

と男が母を殴りはじめた。

このままでは

母も私も

殺される

隣の居間に用意されていたビール瓶を握んだ。
男の後に立つ。

私は

ビール瓶を握んだ腕を

躊躇なく

男の後頭部に叩きつけた。

構成要件に該当する。但し、違法性阻却且つ有責性を問えない行為。

その後、下の階に住人（この方は、家の事情を知っていた）の通報と自首の電話で救急車が到着。

続いて、警察が到着する。

家に踏み込んだ救急隊員は、血だらけで倒れている男を発見。傍らには抱き合いかながら身を寄せ合う、母と娘。

その後直ぐ男は病院に搬送されるが、「頭蓋内出血が原因で死亡」。

殺人の実行者は、男の家族

娘であった。

驚くべきことに、娘は当時12歳。

中学1年生だった。

しかし、この事件の異常な点は他にもある。

事件当時、男の妻と娘は、男から暴行を受けており全身打撲だけでなく、顔面には暴行の後が生々しく残っていた。

毛細血管が切れ、顔は2倍にも腫れていた。

救急隊員は「こう言った」という。

「あの時、二人は震えており、心神耗弱しているように見えた。」

実際、妻と娘の身体にはその時の暴行跡だけで無く、以前からの傷や内出血の跡が消えていなかつた。

娘は病院で全治3ヶ月。妻は全治4か月の傷を負っていたのである。

構成要件に該当する。但し、違法性阻却且つ有責性を問えない行為。（後書き）

（注）サブタイトル

『構成要件に該当する。但し、違法性阻却且つ有責性を問えない行為。』

刑法的には、絶ツツ対あり得ない文章ですよね。
今回は、まあ、「容赦下れい」。

捕捉

そもそも、犯罪の成否を考えるにあたって下記の手順で考えます。

? 構成要件に該当するか？

該当すれば、次へ。しない場合は、そこで終了。犯罪不成立。

? 違法性の検討

「違法性があるか？」では無く、「阻却事由が無いか？」を検討します。具体的には、正当防衛など。正当防衛が成立すれば、犯罪不成立。そこで終了。

? 有責性の有無

刑事未成年や心神喪失などの考慮します。

結論。

違法性阻却事由が認められれば、そこでお終い。わざわざ、有責

性の有無を検討する必要も全く無く、ましてや、「田」、「山」など接続で並べられる事はないということなのです。

加害者として被害者

入院中、家庭裁判所から調査員という人が来て、私の話を聞いていく。

退院後も何度も話を見かれた。
私は、調査員がおばちゃんであつたことで非常に安堵した事を覚えている。

隠し事無く質問に答えた。

この間、私は少年鑑別所に入れられる事も無く、家に帰り、学校に通っていた。

数ヵ月後、家庭裁判所の審判が下った。

不処分だった。

何故ならば、

私はほんの1~2歳の少女であり、
父親からひどい暴行を受けており、

事件当時私は（母も）「殺される」と脅え、
救急隊員も『心神耗弱状態』に見えたと証言し、

余りにも

余りにも情状酌量の余地がある為だった。

皮肉だな。

最初警察に逃げ込んだ時、警察にはただの夫婦喧嘩としてしか相手にされなかつたのだ。

「法は家庭に入せず、みたいな所があるんですね。アハハ。」

なんて笑っている警察のおじさんが信じられなかつた。法の介入無いためこのような事態になつたのに、結局は法によって守られるとは、なんという皮肉だらう。

あの時。

このままでは、殺される！－！

瓶を思いっきり男の後頭部に向けて振り降ろした、あの時。

私には

はつきり

殺意が

あつた

「のままでは、お母さんと私は死んでしまう！－！」

そして男が死んだ。確実に死んだと聞かされた時の安堵感。

心底ホッとした。

自分は、これから罪に問われようが、母と私はこれからビクビクしながら生きて行く必要が全く無い。暴力を恐れて生きて行く必要が全く無い。

殺されてしまふと脅えながら生きて行く必要が全く無い。

これがどんなに喜ばしい事か！！！

少年法は、14歳以下且つＤＶ被害者であつた私には適用が無く、児童保護法によつてわたしは守られ、私は病院の精神科にカウンセリングに通う以外全くお咎めなしどなつた。

しかし、不処分が決まつたその日、私は事件後初めて泣いた。それに気付いた母が、抱きしめて「大丈夫よ」と繰り返し囁いてくれた。

大丈夫よ

事件後、周りの人々は同情的であつた。

少なくとも表面上は。

私は普通に学校に通つていたし、母も、勤務先の社長さんから励まされていた。

しかし、匿名の嫌がらせは絶えなかつた。無言電話・イタズラ電話が相次いだ。時々、家に脅迫状のようなものが届いた。

母は、特に私の安否を気遣い引っ越しを決意した。

周囲の人には「東京に行く事にした」と話し、私たち親子は道内最大の都市に引っ越しした。

引っ越しした先で私たち親子が静かな暮らしをおくれたのは、一重に少年事件だつた為である。

プライバシー保護が最優先される少年事件は、可能な限り秘匿される。

実際、私の尊属殺人事件についても、プレス公開は一切なかつた。人口に膾炙されたのみであつた。

母から聞いた話では、日本における殺人事件の実に4割が、家族内殺人であるという。

大丈夫よ

記憶がフラツシユバックしてしまつた。

と、尋常じやない叫び声をあげてしまつた私はその後部屋に閉じこもつた。

「…お母さんが部屋は入ってきた
ベッドの上でグチョグチョに泣いている私の背中を撫でてくれ、
大丈夫よ。大丈夫」と慰めてくれる。

大丈夫よ

心が緊張から解きほぐれて、いつの間にか眠ってしまった。

翌日。

居間にはいつも通りの風景があつた。

お母さんがお手紙の趣意をしている。

シンタローは、「酔ひやどおせよ」など笑っていた。

挨拶をかえして、私の茶碗にご飯を盛る。昨日の唐揚げやお弁当の余りの卵焼き、豆腐と葱の味噌汁をモツキュー モツキューと食べる。

シンタローも昨日の晩、恐らく話を凡て聞いたのだろう。

それでも、こうして普段と変わらない態度で接してくれる。本当に頭の良い子だな。と少々捻くれた考えをしてしまう。

それから、私は何となく距離を置きたくなってしまった。理由は分からない。

最寄りの図書館は18時には閉館してしまう。グズグズと家に戻り、笑顔を張り付けて食事をする。

その後は、部屋に閉じこもつた。

この食事の時間が私には苦痛だった。

これはご飯大好き人間・永井雪乃の人生18年間初めての事である。ネットで、最寄りの大学の図書館の情報を調べると21時まで開いている。多分、職員には気付かれないとだろう。

翌日、お母さんには話をしてその大学に出かけた。幸いにも、チャリで行ける距離だ。

閉館10分前に、図書館を出て（全く気付かなかつた）家に戻るうとすると、声をかけられた。

「雪乃ちゃん」

振り向くと、ふたつの人影。

私のお父さんとお母さんが立っていた。

私は仰天した。

「おつかれ。じゃあ帰ろつか」

と、お父さんが歩き出す。

私はチャリで来たけれど、どうやら両親は歩いて来たようだつた。

「お父さん仕事は？」

「ん？今日は偶々早かつたの」

確かに、19時に帰つてくる日もある。でもそれは指で数えるほどで、いつも21時過ぎに帰つてくる。私を、二人で、迎えに来てくれたんだ。

大丈夫よ

暖かい。

私は、なんてなんて愛されているんだろう。

大丈夫だ。

大丈夫よ

私の不処分が決まつたあの日。

私が、やるせなさに泣いたあの日。

母が抱きかかえてくれて、私の背中を撫でてくれた。

「大丈夫よ。雪乃。大丈夫よ。大丈夫よ。」

何度も何度も大丈夫、と言つてくれて暖かく抱きしめてくれた。あの時の暖かさと一緒にだ。

3人で歩いて帰つた。

お母さんがポツリポツリと話します。

「最初は、私だけだったんです。普段は無口だけど嫉妬深いな・・・くらいにしか思って無くて。

結婚してから、夫はお酒が入つたり、激情すると、もう何処であつても何時であつても構わず殴られる。抑制が、効かなくなつてしまふんですね。

最初は、私だけだった暴力だったのですが、それが娘に向うようになつて。

このままだと本当に、死んでしまうと本当に本当に怖かった。」

「大丈夫。志保さん、大丈夫だよ。僕が守るから」

そうだった。お父さんは初対面の時、言つたじやないか。

「全部ね。こんなこと言つちゃなんだけれど、僕は裁判官だ。雪乃ちゃんの盾にも槍にもなれる」

私を養子にしたのだつて、私を守るためだ。

法定代理人となつて、裁判官としての知識や経験を活かしてありとあらゆる攻撃や誹謗中傷から守るため、だつた。

「お父さん。私の事『怖い』つて思つ？」

思い切つて、聞いてみる。

「怖いよ。でも、雪乃の考へているような意味じゃあ、ない。
僕にとつては、家族がすべてだ。いなくなつたら、何の意味も無い。

拒絶されたら、と思うと怖くて怖くて正氣じやいられないだろう。雪乃はＤＶの目撃だけでなく、虐待の体験を成長期の10歳位かい。

ら経験していたんだ。

父親や男性への憎悪が残っていると考えるのは当然じゃないか。」

初対面のはしゃぎっぷり。

当初、私は変な美中年だな笑ってしまったつ。

あれは、本当は私に対する予防線だったのか。

「あなたは、本当に私の『父親』だよ。」

「・・・」

「あなたは、私が欲しかったと思える理想の父親そのものだよ。本当にありがとう」

特別なのは、私だけじゃない。

甘ったれんなよ、私。

両目から流れる心の汗をグシグシ拭き、鼻をチーンとかんだ。家に着くと、シンタローが玄関までむかえに来てくれた。

「『』飯。食べなよ」

キッチンには、温めたすき焼と『』飯が用意されていた。モキュモキュ食べる。温かさに、目から水が流れてきた。シンタローは黙つて、玄米茶を淹れてくれた。

「シンタロー」

「何?」

「ありがと『』。」

真っ直ぐ、見つめた。

言つんだー。言わなきやーーー

「本当に、ありがとう。」

あの日、わたしが、急に、急に、申し訳なかつた、と、反省して、「

途中から、歯の噛み合わせが出来なくなつてしまつた。

何故かガチガチと震えてしまい、止まらない。

私の手も、身体もブルブル震えていた。

あれ？シンタローは怖くないのに何でこんなに震えているんや？

怖くて、視線を会わす事が出来ない。

「 もう、良じよ」

シンタロー。

今、どんな顔しているの？

チートな義弟と平凡な姉

あれから、私は勉強を口実に21時に帰るよつた事はしなくなつた。夕方に帰り、お母さんとシンタローと3人で夕食を食べる。食器を洗い、部屋で90分位勉強する。
気分転換に居間に行くとお父さんが帰ってきて、飯を食べている。お父さんは、あの日を境により仲良くなつた。
良き父として、相談相手として、私にとつて本当に掛けのない人だ。

この日は、うちのチートな弟に数学の勉強をお願いしていた。

こいつはわたしの受験現役時代に、大学入試レベルの〇会の数学の問題ですら解いていた。

当時はシンタローも受験生だったので遠慮していたが、現在は高校1年生だし、家庭教師をお願いしていた。

私はその通信教育のみで、塾には通つていなかつたので、シンタローの解説は分かりやすく、お金も掛からないし重宝していた。

勉強が一段落して、夕食の準備に取り掛かる。

今日は両親はデートに行つており、二人のみなのでシンタローの大好きな鳥の唐揚げだ。

シンタローにも手伝つてもうつ。

漬物、キャベツを切つてもらい食器に盛つてもうつ。

私は唐揚げをあげて、朝の残りの茄子の味噌汁をよそひ。パリッ ジュワ～として、美味しい。

突然シンタローが話しうした。

「俺には話してくれないの？」

「話？」

「俺だつて、黙つてゐるの限界。

あの日から、父さんとも最近嫌味なくらい仲良いじゃない。俺だけ仲間はずれにしないでよ。」

嗚呼。今までこれに悩んでいたのか。

シンタローは本当に良い子だなあ。と頭が熱くなる。

直球で、ちょっとシスコンだけど、私の心に十足で踏み入る様な事を決してしない。

「何があつたの？話せる所まででいいんだ。」「何が知りたいの？」

「全部。雪ちゃんがどんな事をされたのか。どんな事をして、どんな事を考へているのか凄く凄く知りたいんだ」「長くなるよ」

「いいよ。俺にも、ちゃんと、過去の話をして欲しい。俺は何も知らないから。」「

モツキュモツキュ。

？？？

あれ？何だか、噛みあわない。

「知らないの？」

「知らない」

「私が部屋に閉じこもつた日に聞いたでしょ？」

「何も」

「初対面の日は？ホテルで中華料理食べた日、お母さんと一緒につたでしょ？何の話したの？」

「え？俺の好きな食べ物とか苦手な物とか、あ～あと、雪ちゃんの

好きなタイプとか」

「お父さんやお母さんから聞いてないの？」

「何も」

「何も？さつきから何もってどういう意味？」

『先日急に変になつたのは、どの部分が問題なの』ってこと？
それとも『先日の事だけじゃなくて、その原因それ自体知らない』つてこと？

「後者の方。具体的な事は本当に何も知らない。
何となく男の人が苦手なのかな、とか大きな音にビクッとするな
つて事くらいしか、知らない。」

呆然とした。

『知らない』？

勝手にシンタローはチートだから、何でも出来るし知つていいもん
だと勘違いしていた。

嗚呼。

この子は、何て真つ直ぐな子なんだろう。
私は何て周りの人間に恵まれてているのだろう。
本当に、大好きだ。
シンタローは、私を嫌いになるかもしねれない。
私を、軽蔑して『人殺しがつ！！出て行けッ』って言つかもしだ
い。

でも、この子は今も真つ直ぐ私を見ている。

大丈夫よ

頭で、誰かが囁いた。
うん。大丈夫。

理解者

私は、凡てを話した。

話を黙つて聞いていたシンタローが真剣な顔で口を開く。

「雪ちゃん。

俺、実は、出て行つたお母さんから性的虐待を受けていたんだ」

「えつ……！」

「うん。それで、俺は何人か子供を出産して、何人かは流産しちゃつて、

医者からもう妊娠は危険ですよ、って言われて。

ソレを母に言つたら避妊はしてくれるようになつたなんだけれど、虐待は終わらなくて。

この関係は、何年も続いたなんだけれど、仕事場で、素敵な人と出会つて、

俺はその恋人と結婚したいから、母にこんな関係は辞めるよういつたら、

母が激怒して、俺を監禁したんだ。俺は、もう堪らなくなつて母を絞め殺したんだ。

これ聞いて、俺の事嫌いになつた？」

ならない。隣で一番の理解者になつてやりたい。

遅ればせながら、シンタローの言わんとしている事を理解する。

昭和43年に実際に起こつた尊属殺重刑規定違反判決の事だ。判決は昭和48年4月4日に出た。

「私が、あの日あんなに脅えていたのは、私の記憶を再び体験してしまったからだと思う」
「同じ体験？どれが、該当するのか分かる？」

『ただいま』

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

『おかえりなさい』

怖いよおおおおおおおおおおおお

久しぶりの男の顔。

このままでは、殺される…！

崩れて笑顔に。

このままでは、お母さんと私は死んでしまう…！

『よくもやつてくれたな』

よくもやつてくれたな。
フランクシユバックして、再び、私は過去に甦ってしまう。

「大丈夫だよ。大丈夫」

背中に温かい温もりを感じる。

シンタローが、私を包み込みように腕をまわしてくれて、背中を優しく撫でてくれる。

大丈夫よ

うん。大丈夫。

「あの男は笑って、『よくもやつてくれたな』って言ったの」

「うん。」

「怖かつた。仕返しされた事も、それを楽しみにしていた事も。」

「もう、大丈夫だよ」

「うん。大丈夫」

私は、本当はとても怖かつたのだ。

お父さんやシンタローに決定的に避けられる事が。

自分にとつて、本当に大切な存在である人から、怖がられ、軽蔑され、嫌われる事が、本当に本当に怖かつた。

お父さんやシンタローを何となく避けてしまつたのは、自己防衛本能からか　　イヤ違う。そうじゃない。自分が傷つくるのが恐ろしくて、自分から距離を置いたのだ。

傷つく前に、自分から離れようとした結果なのだ。

でも、避けられた方の気持ちはどうだったんだら？
何となくだが、避けていた私と同じで、ご飯が全く美味しいくなかったのではないかと思った。

それから。

その翌年、私は一浪の末、何とか希望大学の教育学部に合格した。すると、シンタローが「同じ大学に行こうかな」ときた。

「へえ？数学があれだけ出来るんなら、理系とか？」

「うーん。実は、心療内科とか精神科とか、気になるんだ」

ドクン

胸がうたれた。

私と母は、あの事件後、カウンセリングに行く事が義務化された。

特に私は2年間の間、月に一度は通っていたのだ。
私はその話をしてた記憶がある。

「カウンセラーになりたいの？」

「漠然と、だけどね。」

「そつか。お父さんにも話すと良いよ。本当に、いつも良いアドバイスをしてくれるから」

と私が言つと、シンタローは何故か拗ねてしまった。

家族は家族

「HAHAAA 辞令がでちゃったよッ
新しい配属先は 福島 だよッッ！！」

爽やかな土曜の朝。相変わらず、キラーンと効果音付きでお父さんが言つた。

次の配属先は福島地裁。

「はっ？ また転勤？ 結婚したばっかりなのに、単身赴任かよ」

シンタローは今日知つたらしい。

私は、昨日お父さんとお母さんから話を聞かされた。
三人で話し合つた結果、私は一人暮らしでこちらに残り、母は新天地までついていく事に決まった。
この家ともおさらばか。寂しいな。

「何言つているんだ。志保さんも一緒に行くに決まつてているじゃないか」

「えつ？俺は？」

「うん。どこかの高校に編入しないとな」

「じゃあ、雪ちゃんはっ？」

「え？普通に一人暮らしだけど？」

とたん、シンタローが血相を変えて反対した。

「ダメッ！！駄目ですッ！ そんなの俺が許しませんッッ！－！」
「じゃあ、雪ちゃんが頑張つて合格した大学辞めさせちやうの？」「え・・・。それは」

「晋太郎。我が儘言つちや駄目だぞ」

嗚呼。この声は、本当に良い。

心にすうと沁み込んでくる。

シンタローは、何か言いたげな顔をしたまま口を開いた。

「良い頃」

と、私が一言。

ギョッとした顔で、シンタローが私を見つめる。

お父さんは照れている。

お母さんさ、うんうん頷いて同意する。

「わつでしょわつでしょ。聰さんは、素敵な声なのよ」

「ほわあ～。NHKのアナウンサーばかりの良い声。

本当に、凄く、素敵だね」

「え？ いやあ。そんなあ。」

「謙遜しないで下さい。うわ～～～。その声を聞くとドキドキする」

「雪乃は、NHKアナウンサー大好きだものね。登○さんとか」

うつう。実はその通り。カアアと顔が熱を帯びる。

私は、声フェチなのである。

北海道に磨が来た時は、狂喜乱舞したものである。

「~~~~~！」

シンタローが静か～～にオハシをテーブルに置いて、私を睨んだ。
すかさず、お父さんがフォローする。

「シ・・・シンちゃん？ 落ち着いてね？」

「雪ちゃんー雪ちゃんの好きなタイプは、『優しい人』なんでしょう？」

「え？ 私の好きなタイプは『落ち着いた声の人』だよ？」

「母さん！ 全然違うじゃないかあッ！」

なんで私の好きなタイプを、私に聞かないんだろう。

あらあら、なんて香氣に笑つていてるお母さんもお母さんだ。

「雪ちゃんー俺も数年経てば、父さんみたいな声になるよッ！ ……
多分」

「シンタローはカツコイイから、数年経つたら見た目も楽しみだよ
ー口ッ。

シンタローは出鼻を挫かれたのか、真っ赤な顔で「そそそそそ」と消え入りそうな声で返事をして食事に戻る。

それから、引っ越しの時期や私の賃貸アパート探しの話をまとめていく。

経済力と実行力のある父のお陰で、私の住むアパートの心配は全く無い。

事実、翌日にはあっけなく優良賃貸が見つかった。

引っ越しの準備が、一段落したある日の午後。

両親はデートに出かけ、シンタローと家に一人っきりになった。

「シンタロー、ご飯何が良い？」

「ん~。俺も手伝うよ」

二人で、一緒に夕飯を用意する。

と、言つても冷蔵庫には生ものは無いので、乾麺を茹でて一緒に食べる。

シンタローは、チャリで近くのスーパーからお惣菜の天麩羅を買つて来てくれた。

ズズーとうどんを啜りながら、黙々と食べる。

私が、食器を洗つて居間に戻ると、シンタローが眉間に皺を寄せて座つている。

「神妙な、顔してるよ」

「・・・早く大人になりたい。一人で何でも出来る様になりたいよ」

シンタローが急に哲学的な話をし出した。

「シンタロー、離れ離れになつたらもう家族じゃない？」

「そうじやない。はぐらかさないでよ。」

「うん。『めん』」

再びお互い、無言。

先に私から沈黙を破つた。

「触れても良い？」

「・・・いいよ」

ゾクツ、と鳥肌が立つた。シンタローの声がひびく擦れていたのだ。手を伸ばして頬を撫でた。

視線で自分の指先を追うが、痛いくらいの空氣で自分がじっくり見られている事がわかる。

頭に移動し何度も撫でる。

ソロソロっと、視線をシンタローに戻した。

目があつ。

頭を撫でていた手を再び頬に、さらに、唇に指先で触れた。

見つめ合つたままシンタローが私の手を握り、手のひらにグッと口

づける。

背中から首にかけてゾクゾクつと震えが走る。自分の臨界点は既に突破している。震えながら、それでも、なんとか、口を開いた。

「好きだよ。シンタロー
でも、ダメ。まだ、ダメ。」

シンタローは頭の良い子だ。

今回は私は折れる気は全く無く、彼も分かっていると確信していた。シンタローが口から私の手を離した。そのまま強く握られているが、下を向きフーッとため息をついた。私もつられて、緊張を和らげる。

「俺も好きだよ。」

顔をあげると、じつと見つめられる。

「浮氣、しないで。」「うん。」「男を部屋にあげるのもダメ。」「うん。」「あと2年、俺がそっちに行くまで待っていて」「うん。」「うん。」

他には無いのかな?
では、私からも。

「じゃ、次、私からね」

「どうぞ」

「他の学部に興味があつたらそれも考えなよ。

あと、興味のある教授とか、研究とか。ちゃんと、他の大学への進学も考える」と。

浮氣は嫌だけれど、本命の子が出来たら応援するか「無駄」
「ん?」

「俺の為を思つて言つているんだりつけど、無駄だから。」

ニッコリ。

わお。背中から青筋立つてゐる。天使の笑顔には、凄味があるツー。
まったく。お互い我慢大会だなあ。将来の事はわからないのに。
でも、私の可愛い家族だ。

私は、シンタローと一緒に人生が楽しい。

お父さんとお母さんと、シンタローが大好きだ。

とてもとても好きだ。

けれども、私は私の人生も楽しみたい。

この二つは私の中では矛盾しない。

さあ。明日は どんな一日になるのかな。
これから、どんな未来が待つていてるのかな。

ワクワクする。

願わくは、

家族皆が、（あと、世界中の皆も）
健康で、

元気に生きられますよつと。

お終い

家族は家族（後書き）

参考文献

- ・鈴木伸元『被害者家族』幻冬舎新書・2010
- ・石原豊昭監修『訴訟するならこの1冊』自由国民社・2005
- ・『夫婦親子男女の法律知識』自由国民社・1996
- ・竹之下義弘『養子・特別養子・国際養子』中央経済社・1997

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0768v/>

シボレテ

2011年10月9日00時39分発行